過去6年間の看護研究表題からみた一考察

川崎医療短期大学　第二看護科

林　喜美子　　中石　久美江

（昭和60年8月29日受理）

A Review at the Themes in the Nursing Studies for the Past Six Years

Kimiko HAYASHI, Kumie NAKAISHI

Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

Kurashiki 701−01, Japan

(Received on Aug. 29, 1985)

Key words：看護学，看護研究，表題

概　　要

本学における「看護研究」の現状を，学生の関心分野を一つの視点として分析し，今後の方向を見い出したいと考え，「看護研究発表会集録」を基に調査した。

その結果，自分たちの教育や生活への関心は高く，研究テーマを学生に選ばせるようにした4年前から看護を取り巻く医療や社会へも目が向けられるようになっていることが分かった。これらの事から，看護学総論の教科目を体系的に整理して「看護研究」の目的と位置づけを明確にすること，「受け持ち患者ケースレポート」との関連を考えた「看護研究」の効果的な指導方法を検討する必要があるなどの結論を得た。

はじめに

看護学を確立するためには，看護に関する問題を追求し，一つの理論として体系化していく看護研究は重要である。

本学では，臨床実習の中で「受け持ち患者ケースレポート」を個人でまとめることを課題にしているが，それとは別に看護研究として数人のグループでテーマを選定し，まとめて学内で発表会をしてきて6年になる。

看護研究では，教育や生活の場そして看護を取り巻く社会の問題に気付き，追求していく態度を養うことを一つの目標にしている。

今回，本学における看護研究の現状を分析し，今後の方向を明らかにしたい，と考えて6回の「看護研究発表会集録」を基に調査したので報告する。

1　調査対象と方法

(1)調査対象：第1回（昭和55年）から第6回（昭和60年）までの「看護研究発表会集録」にある論文152題について。論文は，原則としてグループ研究で第1回と2回は症例研究，3回から6回は研究の種類は自由である。

(2)調査方法：表題・研究の種類・研究対象と場所を調査する。

①　論文の表題は,「看護関係雑誌文献目録」の件名標目（見出し語）一覧に基づいて分類し，併せて研究の種類別でも分類した。

②　症例研究（１群）と調査研究，実験研究，文献研究（２群）に分け，１群は患者の疾患と年齢と健康の段階について２群は研究対象と場所について比較検討した。

2　結　　果

方法①によって分類すると，表Ｉのようになる。件名標目の大項目から表題数の多いものをみると，１看護教育と成人看護・成人保健の20題（14％）が同数で，２小児看護・小児保健17題（11％），３看護技術16題（11％），４リハビリテーション看護14題（９％）と続いている。さらに細項目をみると，看護教育では，1)一般に含まれるもの14題で，(1)健康に関するもの６題，(2)職業観に関するもの４題，(3)寮・学生生活に関するもの２題，(4)読書２題である。それぞれの表題をみると(1)－①本学看護科学生の健康に対する認識②食生活が影響する場合の貧血を考える③朝食の欠食実態調査④看護学生の精神衛生について⑤看護学生の便秘の実態⑥白癬菌罹患の現状と考察，(2)－①看護職に対する意識調査②看護科学生の献血に対する認識③実習衣の認識度④ナースキャップの意識と改善，(3)－①学生寮における看護科学生の生活状況の一端②学校生活に対する学生の認識度，(4)－①当病院における看護婦及び看護学生の読書傾向②本学学生の読書傾向についてである。

2)臨床実習と実習評価に含まれるものが６題ある。①よりよい病院実習にするために②看護場面における学生の学年による変容③バイオリズム自律訓練の看護への応用を考える④臨床実習における不安の一考察⑤実習に対する看護学生の認識⑥学生の看護場面における分析評価がある。

成人看護・成人保健では，1)循環器疾患６題，2)脳神経疾患，悪性腫瘍，整形外科疾患各３題，3)内分泌，皮膚疾患各２題，4)心身症１題である。

２小児看護・小児保健は，1)小児の疾患と看護７題で白血病４題，悪性腫瘍３題，2)病児の入院・入院生活６題で，3)その他として母親への看護が２題である。

資料Ｉ　件名標目（見出し語）一覧
－大　項　目－

1	看護（概論・一般，含：看護哲学）	29	救急医療と看護
2	看護（その他）	30	手術室看護・術前術後の看護
3	世界各国の看護事情	31	リハビリテーション看護
4	看護史・看護職の伝記	32	臨床検査と看護
5	ナイチンゲール	33	人工透析と看護
6	看護倫理	34	栄養学・食事療法と看護（含：乳幼児栄養）
7	看護心理		
8	死と看護（含：ホスピス・ケア）	35	成人看護・成人保健
9	専門職としての看護	36	小児看護・小児保健
10	看護業務	37	母性看護・母性保健・母子保健
11	看護計画		
12	看護記録	38	老人看護・老人ケア・老人保健
13	看護評価	39	精神科看護
14	看護管理	40	身体障害・心身障害と看護
15	看護労働	41	継続看護・訪問看護（含：ホームケア）
16	看護制度（含：基準看護）		
17	看護研究	42	プライマリー・ヘルス・ケア，プライマリー・ケア
18	看護教育		
19	日本看護協会	43	公衆衛生看護（地域看護）
20	ICN・その他の団体（ICM・外国の看護協会・国際学会その他）	44	産業保健
		45	学校保健
		46	性教育・性問題
21	看護のための基礎科学	47	環境衛生（含：環境汚染）
22	看護のための基礎医学（解剖学・生理学・免疫学・薬学等）	48	看護職者の需給問題（含：看護婦不足，潜在看護婦）
		49	医療制度・医療問題
23	臨床看護一般	50	へき地医療と看護
24	対症看護	51	医療過誤
25	看護技術	52	婦人労働（含：母性保護）
26	看護用具・用品・医療機器		
27	放射線と看護		
28	ICU・CCU看護		1978年版

表Ｉ　表題の分類

件名標目		総数	第1回 昭和55年	2回 56年	3回 57年	4回 58年	5回 59年	6回 60年	研究の種類 症例	調査	実験	文献
死と看護		1						1		1		
専門職としての看護		4			2	1	1			4		
看護業務		4				2		2		4		
看護記録		1			1					1		
看護管理	付添	2				1		1				
	院内感染	2	1			1	1		1	2		
看護教育	一般	14			1	5	6	2		14		
	臨床実習	5				3	1	1		5		
	実習評価	1						1	1			
看護のための基礎医学		1						1		1		
臨床看護	概論	2				1		1		2		
	入院時のかかわり	2				1	1			2		
対症看護		4	2	1			1		3	1		
看護技術		16	3	1	3	4	4	1	5	5	6	
看護用具，用品，医療機器		7			1	2	3	1		2	5	
手術看護，術前・術後の看護		4		4					4			
リハビリテーション看護		14	6	3	3			2	12	2		
人工透析と看護		1					1			1		
食事療法と看護		4	3	1					4			
成人看護・成人保健	心身症	1			1				1			
	循環器疾患	6	2	1	2	1			4	1		1
	内分泌	2						2		2		
	脳神経	3	2	1					3			
	悪性腫瘍	3	2	1					3			
	整形外科	3		2				1	3			
	その他	2	1	1					2			
小児看護・小児保健		17	4	9	1	1	2		15	2		
母性看護・母性保健・母子保健		10	5				3	2	6	3		1
老人看護・老人ケア・老人保健		6	3	2	1				5	1		
精神科看護		3		1		1		1	3			
継続看護・訪問看護		2			1	1				2		
プライマリーケア		1						1		1		
公衆衛生看護		1			1							1
性教育・性問題		1						1		1		
医療制度・医療問題		1					1			1		
総数		152題	34題	28題	18題	25題	25題	22題	75題	63題	11題	3題

3看護技術は，1)清潔，検温など一般6題，2)環境4題，3)排泄3題，4)褥瘡・罨法・消毒法が各1題ずつである。

4リハビリテーション看護では，1)脳卒中のリハビリテーション7題，2)心疾患と言語のリハビリテーションが各2題，3)椎間板ヘルニアと乳房切除術後のリハビリテーションが各1題となっている。

以上5件名標目は，14題（9％）以上の表題があるものとなっている。反対に5題（3％）以下の少ない件名標目は，1看護管理　2専門職としての看護　3看護業務　4臨床看護　5対症看護　6手術室看護，術前・術後の看護　7食事療法と看護　8精神科看護　9継続看護・訪問看護となっており，その他の標目が各1題ずつとなっている。

取り上げられていない項目には，看護労働，看護研究，産業保健，学校保健，環境衛生，看護職員の需給問題，婦人労働，へき地医療と看護，日本看護協会，ＩＣＮその他の団体などがある。

研究の種類をみると，症例研究75題（49％），調査研究63題（41％），実験研究11題（7％），文献研究3題（3％）となっている。

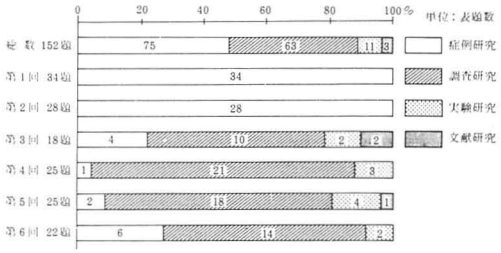
種類別に件名標目をみると，症例研究は成人看護・成人保健が16題，小児看護・小児保健15題，リハビリテーション看護12題が多い。調査研究は，看護教育19題，看護技術5題，専門職としての看護，看護業務，看護管理，臨床看護が各4題で次が母性看護・母性保健・母子保健3題となっている。

実験研究は，看護技術6題，看護用具・用品・医療機器5題である。

文献研究は，成人看護・成人保健，母性看護・母性保健・母子保健，公衆衛生看護がおのおの1題である。

6回の変化をみると図Ｉのようになる。第1回と2回は症例研究に限定していたが，研究方法を自由にした3回から，調査研究が約6割から8割を占めるようになっている。残りが症例研究と実験研究で文献研究は第3回に2題と第5回に1題あるだけである。

調査方法②により1群の対象疾患を分類する



図Ｉ　研究の種類

表Ⅱ　症例研究の対象疾患分類

単位：表題数

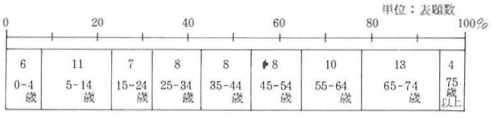
傷病大分類	総数	第1回（55年）	2回（56年）	3回（57年）	4回（58年）	5回（59年）	6回（60年）
総数	75	34	28	4	1	2	6
循環系の疾患	31	19	9	1	0	0	2
新生物	13	2	9	2	0	0	0
血液及び造血器の疾患	6	1	4	0	0	0	1
精神障害	5	0	1	1	1	1	1
妊娠・分娩及び産褥の合併症	5	5	0	0	0	0	0
筋骨格系及び結合組織の疾患	4	0	2	0	0	1	1
消化系の疾患	3	2	1	0	0	0	0
先天異常	3	2	1	0	0	0	0
感染症及び寄生虫症	2	1	1	0	0	0	0
呼吸系の疾患	1	1	0	0	0	0	0
泌尿生殖系の疾患	1	0	0	0	0	0	1
皮膚及び皮下組織の疾患	1	1	0	0	0	0	0

傷病大分類は国際疾病傷害及び死因統計分類を参考にした。

と表Ⅱのようになる。

対象とした疾患で多いのは，循環系の疾患31題（脳血管疾患17題，虚血性心疾患7題など），新生物13題（白血病・脳腫瘍など7題，胃の悪性新生物3題など）で6題から5題の血液及び造血器の疾患・精神障害・妊娠分娩及び産褥の合併症が続いている。

対象者の年齢構成をみると，図Ⅱのようにな

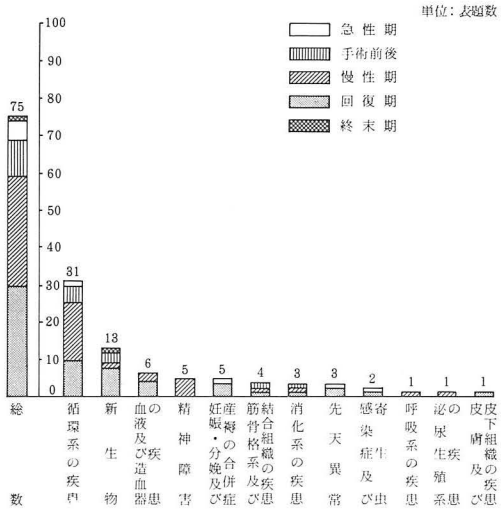


図Ⅱ　症例研究対象者の年齢構成

る。各年齢に渡っていて大きな偏りはないが，65歳から74歳の老年期初めの者13題と5歳から14歳の学童期の者11題が僅かに多い。4歳までの新生児期と75歳以上の高齢者は少なくそれぞれ6題と4題である。

次に対象とした患者の健康段階を5期に分けてみると図Ⅲのようになる。

回復期30題，慢性期29題，手術前後10題，急性期5題，終末期1題となる。慢性期と回復期の段階にある患者をみている症例が，約8割である。急性期は，循環器の疾患，妊娠分娩及び



図Ⅲ　疾患別にみた健康の段階

産褥の合併症，先天異常，感染症及び寄生虫症，皮膚及び皮下組織の疾患がおのおの１題ずつで，終末期は新生物が１題である。

２群について(1)研究対象を人と人以外に分けてみると表Ⅲのようになる。

表Ⅲ　対象の分類

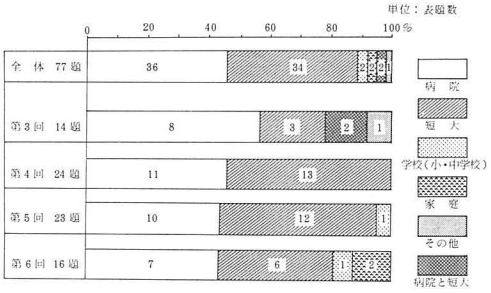
単位：表題数

区　分	総　数	第３回 昭和57年	4　回 58　年	5　回 59　年	6　回 60　年
表題数	77	14	24	23	16
人以外	17 (22％)	5 (36％)	4 (17％)	3 (13％)	5 (31％)
人	60 (78％)	9 (64％)	20 (83％)	20 (87％)	11 (77％)
入院患者	13 (22％)	4 (45％)	5 (25％)	3 (15％)	1 (9％)
外来患者	5 (8％)	2 (22％)	1 (5％)	1 (5％)	1 (9％)
健康人	3 (5％)	0	0	1 (5％)	2 (19％)
医療従事者	3 (5％)	0	0	3 (15％)	0
入院患者 医療従事者	2 (3％)	1 (11％)	0	0	1 (9％)
看護学生	27 (45％)	0	11 (55％)	11 (55％)	5 (45％)
医療従事者 看護学生	4 (7％)	2 (22％)	1 (5％)	1 (5％)	0
医療従事者 看護学生 入院患者	1 (2％)	0	1 (5％)	0	0
付き添い家族	2 (3％)	0	1 (5％)	0	1 (9％)

人が60題（78％）で人以外が17題（22％）である。人では，看護学生27題（45％），入院患者13題（22％），外来患者５題（８％）で，その他医療従事者，付き添い家族，児童生徒などの一般人である。そして又，対象者は看護学生や入院患者の一者だけでなく，看護学生と医療従事者の二者あるいは三者の複数を取り扱っている。

人以外についてみると，看護用具・用品・医療機器に関するものが11題でスリッパ，脱臭剤，氷のう・氷枕，ナースコール，便器カバー，病衣，膀胱洗浄液，手洗い消毒液，清拭用スポンジなどである。次には記録類の診療録，看護記録，日常生活動作表，糖尿病指導表などである。

２群について2)研究場所をみると図Ⅳのようになる。病院36題（47％），短大34題（44％），で91％を占め僅かに小中学校，家庭，保健所などがある。第３回から６回の各回について，短大と病院との比率をみると，第３回－１：2.6　第４回－１：1.2　第５回－１：0.8　第６回－１：1.2で第３回と５回が短大と病院の差が大きいが他は同じである。そして，第３回と４回６回に保健所・福祉施設，小中学校，家庭などがある。



図Ⅳ　調査，実験，文献研究の研究場所

それぞれの表題をみると，①訪問看護の実態②児童生徒の親子観について③小中学校家庭内の初潮教育④プライマリーケアにおける人間ドックなどとなっている。

研究場所と対象との関係をみると，病院で人の場合は入院患者，外来患者，医療従事者，付き添い家族で人以外では，診療録，看護記録，日常生活動作表，糖尿病指導表，脱臭剤，老人

のスリッパ，病衣，ナースコールなどである。

短大で人の場合は，看護学生が大半で人以外は，氷枕・氷のう，便器カバー，清拭用スポンジと手洗い消毒液などで，人以外のものについては実験研究が多い。材料を病院から取りよせて短大で実験をしたり，基礎実験を短大でして病院で効果をみるという方法を取っており，病院と学校の両方が場所となっている。

②の方法によって，1群の年度による，対象疾患分類で第1回と2回をA群とし，第3回～6回までをB群として分けて比較してみた。A群は62題で，B群は13題である。数における差はあるが，A群は学校から症例研究をすることと決めてあり，B群は学生が選定したという違いがある。対象としている疾患についてみると，循環系の疾患は，A群では最も多く28題（45%）でB群では3題（23%）で2位である。精神障害については，A群では1題で6位になり，B群では4題で1位である。妊娠分娩及び産褥の合併症，血液及び造血器の疾患は，A群では5題で5位であるが，B群では1題もない。

考　察

学生の研究指導に対する教師の力量や専門性，時間的余裕など指導者の条件やカリキュラム上の問題は今回考慮せず，表題の分類から看護関係のどの分野に学生の関心が高いかという視点からみた。

学生の「看護研究発表会集録」にある152題は，件名標目（見出し語）一覧52項目のうち23項目に渡っている。表題の分類から考えると，自らの健康観・職業観を問うなど，看護を学びつつある学生としての自覚と臨床実習，看護学の各分野への関心は高い。このことから，現状の教育に関する問題を身近な生活や実習の場に見い出して，明らかにしていくことが出来ていると考える。

死と看護，人工透析と看護，プライマリー・ヘルス・ケア，性教育，性問題，医療制度・医療問題など最近の医療や看護，社会問題となっている事柄にも目が向けられている。

取り上げられていない項目については，学生の立場や専門分野の教員の存在，学校の地理的条件などから考えて，研究テーマに選び難いと思える。

しかし，もう一周り大きく看護を取り巻いている社会環境や，今日の看護が築かれた歴史教育を支えている法律や制度，世界の看護との連携組織などについての関心がほしい。

それには看護学総論の柱となる教科目を社会や医療看護の要求を受け入れて，教育目標を見直し，体系的に整理することである。そして，「看護研究」の目的と位置づけを明確にすることである。

次には，症例研究が半数を占めているにもかかわらず，臨床看護場面の看護心理や看護哲学に関する分野そして，不断の看護実習で看護過程展開に伴う問題として挙げられている，看護計画や看護評価などが少ない。一人ひとりの患者のニードを把握し，計画に基づいて，患者の問題を解決していく看護過程は，臨床看護のどのような場面においても適用される基本となるものである。臨床実習における看護場面の指導について，効果的方法を検討し，現在義務づけている臨床実習ケースレポートと併せて考えていかなければならない。

症例研究群について，患者の疾患，年齢，健康段階の結果をみると，現在死因順位の高い循環系や新生物であり，社会状況を反映して増加傾向にある精神障害である。そして，成人期と老年期にある人の慢性期や回復期にある患者を多く対象としている。この事は，診療・教育・研究を目的としている医科大学附属病院を実習場にしていることの効果と，成人看護実習が母性・小児に比べて長いことの影響が考えられる。

急性期や手術前後そして終末期の患者を対象にした症例が少ないのは，集中実習体制でないため症例を選び難いことと，学生の立場での対応が難しいことが考えられる。

調査研究その他の研究群について結果をみると，短大では看護学生を，病院では入院患者を対象にしている。僅かではあるが，小中学校・家庭・保健所などで性教育や訪問看護の実態を調査している。自分たちの教育や看護観を問うことや，社会で生活している人たちの健康や看

護職への意識を問うことも出来ている。そして又，看護用具の工夫，病棟環境の保全にも目が向けられている。

調査・実験などの方法によって対象が広がっていることが分かる。この事から研究方法は学生の自主選定にした方が，看護研究の一つの目標である「教育や生活の場そして看護を取り巻く社会の問題に気付き，追求していく態度を養う」という姿勢に近づくように思われる。しかし，逆に臨床看護での症例研究が少なくなることが考えられるが，これについては，表題の分類の結果から考察した。現在義務づけている臨床実習ケースレポートとの関連を考えた，効果的な指導ができれば，少しは解決できることと思える。

研究の対象の結果から，今後の方向について考えるならば，医療に従事する専門職を養成している総合短期大学である本学の特色を活かして，臨床検査科・放射線技術科・医療秘書科・栄養科に学ぶ学生を含めたもの又比較したものなどが欲しい。それは病院においても同じで，医療チームとして働いている中での看護職の位置づけ，他職種との関係などについて目が向けられることである。

結　論

1）教育（生活・実習・看護職への意識）と看護学総論・成人小児母性看護学分野への関心は高い。

2）表題を学生の自主選定にし研究の種類が増えたことで，関心の分野が広がっている。

3）症例研究では，回復期と慢性期の患者が多く急性期・手術前後・終末期が少ない。

4）看護学総論の教科目を体系的に整理し看護研究の目的と位置づけを明確にする必要がある。

5）受け持ち患者ケースレポートとの関連を考えた，看護研究の効果的な指導方法を検討する必要がある。

参考文献

1）光好延子他：看護教育カリキュラムにおける看護研究の現状とその考察　第9回教育分科会誌　28～30　日本看護協会　1978

2）高野みどり他：学生研究集録における動向と課題　第16回日本看護学会集録誌　136～139　日本看護協会　1985

3）片山百合子他：2年課程における看護研究指導の一考察　第16回日本看護学会集録誌　133～136　日本看護協会　1985

4）成田登美子他：看護研究への取り組みと看護研究に対する実態について　第10回管理分科会誌　386～388　日本看護協会　1983